

3:1 カナンでの戦いを少しも知らないすべてのイスラエルを試みるために、主が残しておかれた国民は次のとおり。

2 「これはただイスラエルの次の世代の者、これまで戦いを知らない者たちに、戦いを教え、知らせるためである—

3 すなわち、ペリシテ人の五人の領主と、すべてのカナン人とシドン人とバアル・ヘルモン山からレボ・ハマテまでのレバノン山に住んでいたヒビ人とであった。

4 これは、主がモーセを通して先祖たちに命じた命令に、イスラエルが聞き従うかどうか、これらの者によってイスラエルを試み、そして知るためであった。

5 イスラエル人は、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の間に住んで、

6 彼らの娘たちを自分たちの妻にめとり、また自分たちの娘を彼らの息子たちに与え、彼らの神々に仕えた。

7 こうして、イスラエル人は、主の目の前に悪を行い、彼らの神、主を忘れて、バアルやアシェラに仕えた。

8 それで、主の怒りがイスラエルに向かって燃え上がり、主は彼らをアラム・ナハラタイムの王クシャン・リシュアタイムの手に売り渡された。こうして、イスラエル人は、八年の間、クシャン・リシュアタイムに仕えた。

9 イスラエル人が主に呼び求めたとき、主はイスラエル人のために、彼らを救うひとりの救助者、カレブの弟ケナズの子オテニエルを起こされた。

10 主の霊が彼の上にあった。彼はイスラエ

ルをさばき、戦いに出て行った。主はアラムの王クシャン・リシュアタイムを彼の手で渡された。それで彼の勢力はクシャン・リシュアタイムを押さえた。

11 こうして、この国は四十年の間、穏やかであった。その後、ケナズの子オテニエルは死んだ。

「試みるために、主が残しておかれた」とありますが、もともとはイスラエルが主に背いて共存を選んだものです。主はそれを直接の介入で絶つことをせずに、イスラエルを試みるために「残しておかれた」わけです。

このように誘惑や罪は私たち人間に非がありますが、主がそれさえも主権のものに置かれるのです。人間が「神によって誘惑された、苦しめられた」などと言ってはならないのはそのためです。

なぜイスラエルは異教の民と同化したのでしょうか。それはかつて、先祖のヤコブやユダがそうであったように、安全と打算のゆえです。主により頼み期待するよりも、人間に求め、さらには信仰までも歪めてしまったのです。次第に霊的に無感覚になってしまい、「バアルやアシェラに仕え」るようにさえなってしまうました。

イスラエルは他民族に助けられると思っていましたが、結局別の民族であるアラム・ナハラタイムの王によって攻められ、そして屈したのです。異教は何の助けにはなりませんでした。

使徒の働きには「全ての民から好意を持たれた」とありますが、それとはまったく違うものです。初代教会のクリスチャンたちは福音宣教のためにしたのであって、打算からではありませんでした。むしろ主のためなら命も財産もささげる覚悟ができていたのです。

主は常に私たちを「試みて」おられますが、それは怖いものではありません。試みつつ、みことばによって教えてくださり、愛を持って正しくくださるのです。主との交わりがいかに大切に気

づかされます

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

